



特集：北アルプスのライチョウをとりまく“今”を知る

信州自然講座では、苦労話を交え、成果についてお伝えしました。

今回の調査では、早朝の4時から夜の19時まで一時間毎にライチョウがいる位置をGPSロガーに記録にしました。得られたデータを見た第一印象は、なわばり期（図2a）と同様になわばりを解消した秋期（図2b）でもあまり行動する範囲が広がっていないことです。また、彼らは尾根などの自然の境界をうまく利用

しているんだなあということです。爺ヶ岳南峰西尾根になわばりを構えた雄は登山道のある尾根から北にはほとんど足を踏み入れていません（図2a）。また、爺ヶ岳中峰西側（富山県側）を中心に行動している雄は長野県側に滅多に足を踏み入れていません。

信州自然講座では調査の概要をお話ししましたが、今後、詳細に解析し、論文等で成果をお伝えしていきたいと思ひます。（堀田）

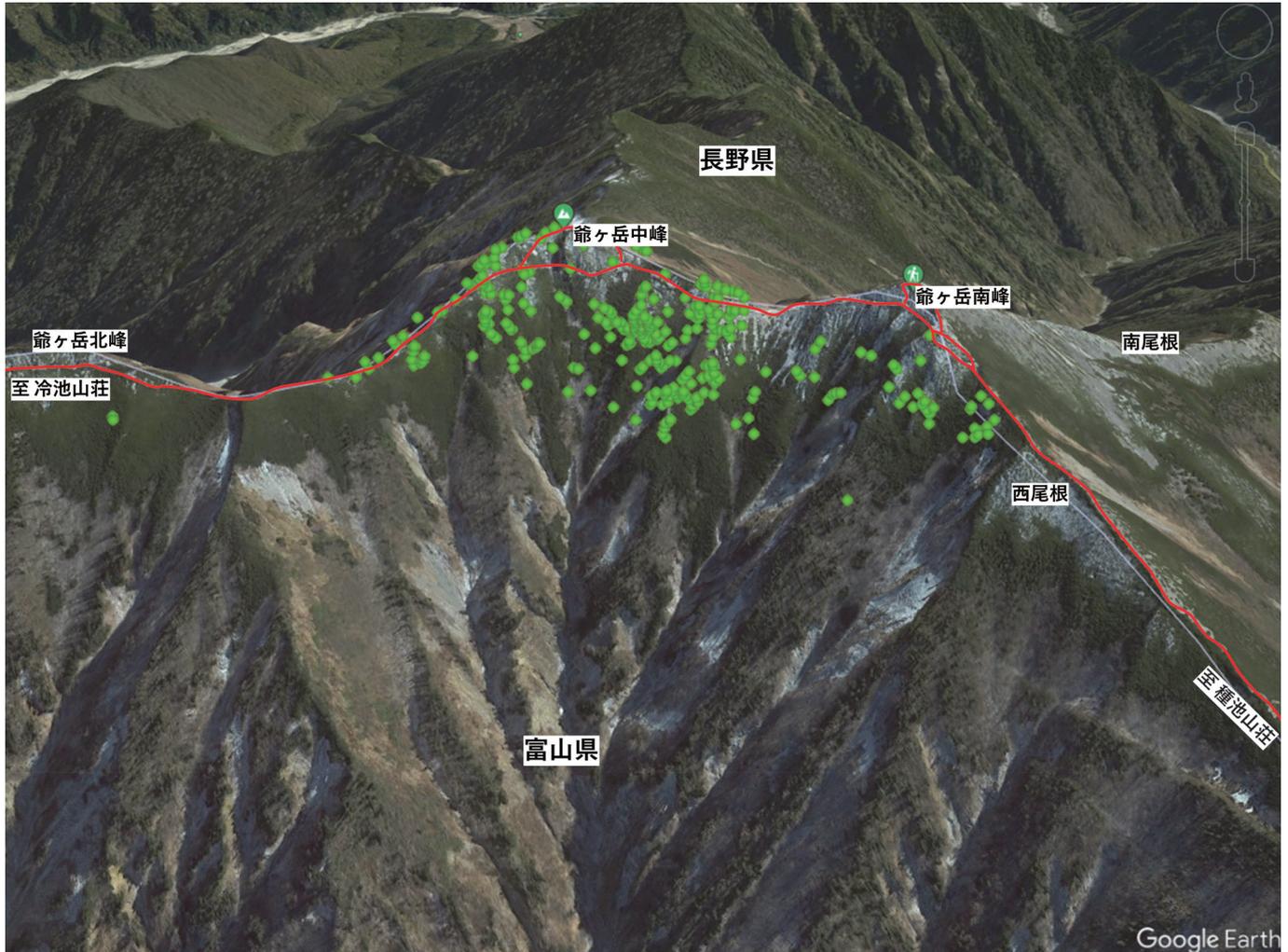


図2b 爺ヶ岳中峰富山県側に行動圏がある成鳥雄の活動点（緑色）（2021年9月8日～10月6日まで4～19時まで1時間毎に取得、ただし衛星の捕捉状況が悪い点は除く）。赤線は登山道を示す。



ライチョウの野生復帰への挑戦 ～市立大町山岳博物館の取り組み

市立大町山岳博物館では、絶滅の危機に瀕しているニホンライチョウの野生復帰を目指して様々な取り組みを行っています。特に、中央アルプスでのライチョウの復活事業が注目されています。

◆中央アルプスでの復活事業

中央アルプスでは、1969年を最後にライチョウが

絶滅したとされていましたが、2018年に1羽のメスが目撃されたことをきっかけに、復活事業が始まりました。環境省や日本動物園水族館協会、大学研究機関などが協力し、2020年には動物園から中央アルプスへの卵の移植や、乗鞍岳の野生ライチョウの家族の移送が行われました。その後、2021年から2022年にかけて、野生由来のライチョウを動物園で

繁殖させ、さらに中央アルプスへ放鳥する取り組みが行われました。

◆ 2024 年度の取り組み

2024 年度には、飼育由来のライチョウから生まれた雛を人の手で育て、中央アルプスへ放鳥することが目標とされました。山岳博物館では、2 ペアのライチョウから 12 羽の雛が孵化し、以下の新しい取り組みが行われました。

1. 腸内細菌の定着：野生ライチョウの糞から作られた腸内細菌が入った粉末を雛に与え、高山植物を消化できるようにしました。
2. アイメリア原虫への抵抗性獲得：雛に軽度の感染をさせ、抵抗性を持たせました。
3. 身体能力向上：飼育室内に高低差を作り、厳しい高山環境に適応できるようにしました。

◆ 放鳥とその後

2024 年 9 月、雛たちは中央アルプスへ移送され、現地の環境に慣らした後、7 羽が放鳥されました。



3 日齢のライチョウのヒナ

放鳥後の追跡調査では、一部の雛が確認されましたが、見つからなかった雛もいました。これからも厳しい冬を乗り越え、子孫を残すことが期待されています。

市立大町山岳博物館では、来年度もライチョウの野生復帰に向けた取り組みを行う予定です。

(岡本 真緒 / 市立大町山岳博物館)

中央アルプスライチョウ復活作戦 ～復活作戦の試行錯誤～

2020年

① 飛来メスの無精卵と飼育個体の有精卵を取り替える

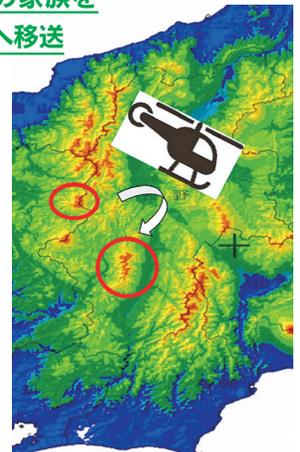
※メスはオスがいなくても毎年卵を産み、卵を温める



【結果】 雛は孵化したものの、**全羽が死亡**
 巣の周辺のセンサーカメラにサルが映っていた
 →メスが驚いて逃げ、取り残された雛は低体温となり死亡した可能性

② 乗鞍岳の野生ライチョウの家族をヘリコプターで中央アルプスへ移送

【結果】 3家族 19 羽を中央アルプスに放鳥
 1ヶ月後の調査ではほとんどの個体の**生存が確認!**



2021年

中央アルプスのライチョウの家族 (11 羽) を動物園へ移送

- 野生ライチョウは**高山植物を消化するための腸内細菌**がお腹にいる。
 一方、飼育ライチョウはこの腸内細菌を持っていない。
- 野生で生活してきた母鳥から生き方を学ばせる





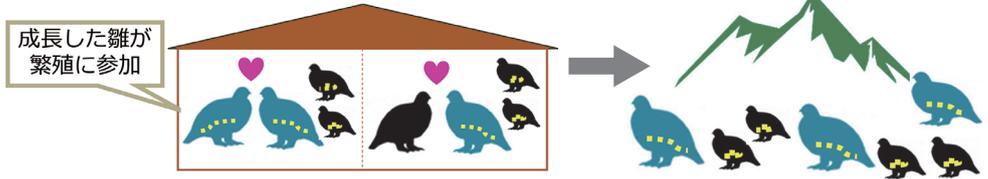
中央アルプスライチョウ復活作戦 ～復活作戦の試行錯誤～

2022年

動物園に移送した家族&その雛 計 22 羽を中央アルプスへ放鳥

動物園で繁殖させた
ライチョウの野生復帰を
初めて成功させた

成長した雛が
繁殖に参加



長野県におけるライチョウ保護の取り組み

◆北アルプス南部での生息状況調査

今年度、クラウドファンディングによる寄付金により、北アルプス南部の常念岳周辺でライチョウの生息状況を調査しました。

生息数調査：6月から9月にかけて、ナワバリ数やヒナの生存状況を確認。推定生息数は188羽（暫定値）となりました。過去の調査結果と比較すると、生息数の変動が見られますが、引き続き定期的な観測が必要です。

中型哺乳類の痕跡調査：114例の痕跡を確認。場所は燕岳、大天井岳、西岳、常念岳で多く、時期は6月に64例、7月と8月合わせて50例と偏っていました。現在、フンの内容物を分析中で、どのくらいライチョウが捕食されているのか等の情報が分かる可能性があります。

◆中央アルプスでの取り組み

中央アルプスでは、サルの追い払いを実施しました。サルはライチョウの子育てや高山植物に影響を与えることが懸念されており、追い払いによりサルの出現は減少傾向にあります。平成30年に約50年ぶりにライチョウ1羽が発見された中央アルプスでは、環境省の保護対策や関係者の尽力により、ライチョウは令和6年9月時点で約120羽まで回復しました。

ライチョウ保護スクラムプロジェクト

これまでも多くの方々からの寄付により、高度技術者（ライチョウサポーターズエース）育成や情報アプリ「ライボス」開発、動画公開、清掃登山などの普及啓発活動も行ってきました。今後も県民や関係者だけでなく、全国の皆様と協力して保護対策に取り組んでいきます。

（坂口 龍之介／長野県環境部自然保護課）



常念岳周辺での調査風景



常念岳で確認されたライチョウの親子（令和6年8月）